

現代の「浮世」絵師 ー谷原菜摘子の絵画ー

国立国際美術館学芸課長兼副館長
中井康之

「美術」と「死」は常に隣り合わせの関係を維持してきた。絵画の主たる出自は宗教画であり、彫刻と共に、亡き者の表象として、そして来世をも支配する神の似姿として存在してきた。近代という時代が到来し、「神の死」が謳われ、そのような神話を表出する装置としての役割を果たすことも漸減するが、美術作品に対する新たな意味付けの要因となったのはシュルレアリスムのような人々の意識下に潜んだ世界を顕現する動向だった。そのような見えない何ものかを表そうとする美術作品は、フォーマリズムに代表されるような理知的で表面的な世界によって価値付けされる進歩主義的動向に対して、歯止めをかけるような役割を常に果たしてきた。

但し、この日本に於いては、さらにもう一つの系譜を認めることができるかもしれない。生まれた翌年、父荒木村重の信長に対する謀反によって、年若い母も一族とともに虐殺されるなか、奇跡的に生き存えた岩佐又兵衛が描いた絵図を一つの源流とする「浮世絵」という風俗画の系統である。又兵衛は一族滅亡後、信長の息子・織田信雄の近習小姓役として仕えた。文芸や画業などの諸芸を披露する御伽衆のような存在だったという。信雄の改易後、浪人となり京都で絵師として活動を始める。40歳の頃、福井藩主・松平忠直に招かれ、その息子忠昌の代まで愛顧を受けて20年程を福井で暮らし、多くの作品を残した。又兵衛の傑出した代表作《山中常盤物語》も、その福井時代に描かれたと推定されている。

同絵巻は、当時人気のあった人形浄瑠璃の演し物を題材としていた。その演し物は、常盤御前が平泉にいる牛若丸を訪ねる旅の途中「山中の宿」で盗賊に殺され、牛若丸がその仇を討つという筋書きである。全12巻、全長150mにも及ぶその絵巻を夙に有名にしているのは、常盤御前が賊に襲われる凄惨な場面である。常盤の黒髪を手に巻きつけ刀を突き刺して、白い柔肌に赤黒く流れる流血場面は、ハリウwoodsのスプラッター映画に負けず劣らずの衝撃的な情景である。幼子の又兵衛が、自らが遭遇した場面を記憶していたとは考え難いが、周囲の者から聞かされてきた自らの生い立ちを、人形浄瑠璃物語の主人公に重ねて、感情移入したような表現になったと考えることもできる。自らの母の惨殺場面を再現するという自虐的行為を、自己の存在証明とするかのような鬼気迫る表現は、見る者の心臓を抉り取るかのような禁断の光景なのである。

少し又兵衛に深入りし過ぎていると思われるかもしれない。しかしながら、谷原菜摘子の作品と最初に対面した時に感じた、魅惑的でありながらも、そこはかとなく暗いイメージ抱かせる画像が、その又兵衛が描く凄惨な場面の絵図を私に想起させたことは事実である。それ故、これまで又兵衛の画業を簡略に素描してきた。それでは次に、谷原作品との邂逅した経緯を語らなければならないだろう。4年程前、「はならあと」という奈良県の地域アート・プロジェクトを訪問し、点在する複数箇所の会場を渡り歩いた。その折り、生駒宝山寺参道地域の旧たき万旅館という廃屋となった巨大な施設跡を最後に訪れた。同会場に辿り着く前には、郡山城下町地域の旧川本邸という旧遊郭にも足を運んでいた。その遊郭の狭隘な薄暗い空間の連年の記憶が残ったまま、夕刻の暗がりの中、その廃屋となった旅館の客間に足を踏み入れたのである。そのような偶発的とはいえ舞台設定が整った上で、谷原の作品群と出会ったのである。中でも目を引いたのは、火の付いた円陣の前に、少しはだけた白い衣服を纏った少女が座り、その絵を見る者を見返すような図像が描かれていた作品だった。私はその静寂の中にも底知れぬ精神の闇を見せつけるような画像に引き込まれた。他にも、暗い林の中を彷徨う裸身の男、暗い竹林の中で遊女と共に少女、暗い公園で裸身の少女が火を吐いている画像等、数多くの作品が犇めいていた。谷原の作品はビロード状の黒い画面を基底材としている。その表現素材の選択も相乗的な効果を生み出し、描かれた少女の暗く錯綜した心情を確かに表し出していた。付言すれば、それらの描かれたイメージは、描き手である谷原の痛々しい記憶が紡ぎ出したものであることも容易に想像された。思い返してみれば、その自傷的ともいふべき表現が、先に記してきた「山中の宿」の凄惨な惨殺場面を描き出した岩佐又兵衛の作品を連想させたのである。

さて、風俗画の系譜である。日本では、早くは桃山時代に狩野派の遊楽図等が見つかることができるが、徳川幕府の体制が確立し、泰平の世の到来に伴って町衆と称される一般市民階級にも楽しむための絵画のジャンルとして急速に広まっていったのである。時に《彦根図屏風》等に描かれた自由な振る舞いを見せる男女の遊興図に、平安の世から用いられている仏教的厭世感にもとづく「憂世」「浮世」という言葉があてがわれるようになるのだが、このような「ままならぬ憂世」と「浮かれて楽しむ」「浮世」を掛け合わせた表現を江戸時代初期に打ち出したのが、この岩佐又兵衛なのである。さて、これ以上詳述する余地は無く、端折るより仕方ないのだが、要するに「死」の影を含んだ「風俗画」としての「浮世絵」を生み出した又兵衛の精神を、谷原菜摘子は隔世遺伝的に受け継ぎ、その嫡子としての道を着実に歩み始めたものとして、その画業を捉えることができるだろう。今浮世絵師としての谷原と我々は出遭ったのである。